ミシェル・フーコーにおける言説の諸性質について

——〈言説分析〉から〈言説〉の諸分析へ——

Various Characteristics of Discourse in Michel Foucault:

From “Discourse Analysis” to Various Analyses of Discourses

渡 辺 彰 規

WATANABE Akinori

This paper investigates how discourse as an analytical framework can be constructed in the development of Michel Foucault's analyses. By doing so, the paper argues that multiple frameworks exist in analysis using the discourse. Moreover, the paper shows that the analytical method used and the character of the discourse in question rely on the researcher's understanding of the mechanism of society, as well as on his attempt to strategize discourse as an analysis framework to better understand social phenomenon.

Given these points, a discourse should be understood in relation to the object of analysis. Therefore, the methodological concern should shift from explaining the nature of discourse analysis to assessing the analytical feasibility of the discourse.

1. はじめに

「言説分析」なる方法をめぐっては様々な議論がなされてきた。特に、言説という対象を、言説内容とそれが生み出された社会的コンテクストとの関係の中でいかなる性質を帯びたものとして考えるべきであるか、という重要な論点をめぐって様々な立場からの主張がなされてきたことは記憶に新しい⁽¹⁾。

と同時に、そこでは以下の二点で立場の相違を超えた共通点も観察できた。第一に、多くの論者において「言説分析」といわれるときに、言説というものの社会からの自律というテーゼを打ち立てた『知の考古学』[1969]執筆期のM・フーコーの議論が主に参照されてきたということ。そしてこの点が重要なのだが、第二に、これらの論者らがともに、言説の社会からの自律というこのテーゼの妥当性自体については検証しようとはしていないようだ、という点である⁽²⁾。ここから理解されるのは、「フーコーの言説分析」と言われるときに、その疑うべくもない本質として、言説というものが社会から自律しているという前提が措定されているということである。あるいはこうも言える。この前提を否定してしまえば、それは、「フーコーの言説分析」自体の存在理由をも否定することになると考えられている、と。

だが、よりよい言説分析についての方法的な議論をする際に、かくも強い前提を議論の余地のないものとして予め据えてしまうのは妥当なことなのかどうか。そこでは「言説とは何か・何であるべきか」という定義が先行する一方で、そのような定義を生み出す元となっているはずの社会と言説とが有する特定の関係についてのテーゼ（より一般的には、社会のしくみについての特定の仮説、と言うべきか）が疑われることなく導入されてしまっている。

これに対して本論としては、言説と社会のしくみについての上述の関係を逆転させて、

以下のように主張したい。すなわち、言説が帯びる性質とは、論者らの社会のしくみについての背後仮説から導出される、と。このとき、論者らの社会のしくみについての仮説はその妥当性についての検証を逃れ得ないばかりではなく、しくみについての仮説に適合するように戦略的に言説の性質を構築していく可能性と、その可能性自体を方法論的に評価するアリーナが新たに拓かれることになるだろう。

このことを考えるうえで、言説という存在に最も繊細に反応した思想家のひとりであろうフーコーの理論的歩みというのは格好の一事例を提供するはずである。本稿は、彼が『知の考古学』以降、いかに相異なる言説の性質を定式化してきたのかをみることを通して、言説の帯びる諸性質がいかに社会のしくみについての背後仮説に依存しているかを指摘したいと考えている。

具体的には本稿は以下のような構成をとる。ミシェル・フーコーの生涯にわたる分析の展開を題材として、(a) 先ずは、60年代のフーコーの議論を参照しながら、フーコーが言説という対象を成立させた過程を追う。ここで示したいのは、言説とは、社会のしくみについての特定の仮説に基づいて構築されているという点である。例えば、今日「フーコーの言説分析」といわれるときに初めに想定されるような言説の性質についても、それは絶対的なものではなく、その社会のしくみについての仮説の妥当性とききあわせての討議に開かれているということを論じたいと考えている。(b) その後、フーコーは当初抱いていた理論的関心を捨て、新たな側面から言説なる対象に注目する。そこで、それぞれの時期で言説というものがどのような観点から注目され、その場合に言説のどのような性質が発見されたか、ということを検討したいと考えている。そうすることで、これまでの諸議論が前提としていながら見えにくくされていた論点、すなわち、言説という分析単位がどのような関心から見出され、それにどのような理論的性能を期待されて、どのような性質を帯びることになったか、といった方法論的に重要な諸論点が可視化されるということが見込まれているのである。

2. 言説という対象の発見

(1) 記号論的な志向の背景

今日「フーコーの言説分析」といわれるときに、凡そ自明なことのよう想定される言説の性質の源流を再構成するためには、60年代におけるフーコーの理論的な歩みのうち、言及されることの少ない彼の文学論を参照する必要がある⁽³⁾。社会学的には、60年代のフーコーの主要著作としては、『狂気の歴史』[1961→1972]、『臨床医学の誕生』[1963a]、『言葉と物』[1966a]、『知の考古学』[1969]などが挙げられるのが普通であろうが、この時期にはまだ、フーコーは盛んに芸術論・文学論を展開してもいたのである。

さて、この時代にヌーヴォー・ロマンに触発されて執筆された多くの文学論において主張されていたのは、基本的には、内面を喪失し感覚器へと切り詰められた「人間」が、メディアと物質的に衝突しあうという構図であった。一般的な話をすれば、この構図からやがて、意味へと溶解することが不可能な記号の物質性自体を対象とするような学問的構想が浮上してくることになる⁽⁴⁾。

フーコーもまた、こうした時代の空気の中で、言語というものをその物質性において把握しようとするに至る。その志向を最も先鋭的に示す論考として、本稿では、『レーモン・ルーセル』[1963b]なる文学論を採り上げることにはしたい⁽⁵⁾。

このレーモン・ルーセル (Raymond Roussel) というのは、1877 年生まれ作家の名前である。後述する奇妙な小説をたくさん書いた後に、1933 年「私はいかにしてある種の本を書いたか」という遺書代わりの原稿を残して自殺している。この「私はいかにして……」では、生前の風変わりな小説がいかなる手法によって書かれたのかについて、驚くべき種明かしがなされている。

例えば、『黒人の中で』と題されたルーセルの作品は、1 行目にはこう書かれている。

① Les lettres du blanc sur les bandes du vieux billard.

そして、最終行はこう終わっている。

② Les lettres du blanc sur les bandes du vieux pillard.

最後の単語における語頭の 1 文字が異なるだけで、両者は全く異なる意味を持っている。

①では、ビリヤードという文末の単語が残りの単語の意味合いを決定し、「古びた撞球台のクッションにかかれた白墨の文字」となり、②は、pillard が盗賊を意味することから、「年老いた盗賊一味についての白人の手紙」となる。そして、ルーセルの遺書によれば、彼は最初にこうした 1 組の文章を作り出してから、それを小説の前後に据え、そして後から、つじつまの合うような話の筋を考えたとされているのである。

このようにして作られた物語の特性とはいかなるものであろうか。それは、この物語が、①現実のいかなる決定因の影響からも逃れ、かつ、②製作者の創造性が極めて抑制されるように仕向けられているという特性であろう。その代わりに、物語を規定しているのは言語の構造である。フーコーはこの点に大きな関心を抱いているのである。

例えば先の例に戻ると、ここで bandes とは、前後の文脈次第で、(撞球台の)「クッション」にもなれば、(盗賊の)「一味」にもなるという点に注意したい。ここに見られるのは、認識者の意図からある現実の事物を指し示すべく 1 語が選ばれたとしても、その 1 語は、意図を逸脱し、現実のありさまを超越しつつ、複数の意味合いを帯びていくという事態である。フーコーによれば、このとき、我々は自律した言語的な領域の作動に立ち会っていることになる。

後の論考において(「外の思考」[1966b→1994])、フーコーはこうした言語領域の主体や対象からの自律を指して、「外在性」(=*extériorité*)と呼ぶだろう。

要するに、言語はもはや……何かの意味の伝達ではなくて、生な実体としての言語の開陳、露呈された純粋な外在性なのであり、話す主体はもはや言説の責任者(つまりその言説を支え、その中において明言しかつ判断し、ときにはこの目的のためにしつらえられた 1 個の文法形態のもとに自己を表明する人)であるよりは、非存在、その空虚の中において言語の無際限な溢出が休みなく遂行される非存在なのである。[Foucault 1966b→1994:519=1999:337]

通常、我々は、言語とは、認識者の意図から生じ、対象を適切に名指すための透明な媒体であると想定しがちであるが、フーコーは幾つかの文学論を経るうちに、そうした主体や対象へは還元しきれないような自律性を言語の中に見出したのであった。

さて、フーコーの初期文学論は殆どこの外在性を指摘することにあてられているが、この執拗さを理解するためには、この時代の少し前から支配的であった分析手法である、マルクス主義と現象学への反発がその根底にあったのだ、ということを押さえておく必要がある [Foucault 1977→1994:146-147=2000:198-199]。すなわち、①現象学の想定する主体の意図への還元、②マルクス主義の想定する状況への還元、といったルーティン化した論理への反発こそが、若きフーコーの中に記号論的な志向を生み出した、と考えること

ができると思われるのである。

（２）言語の自律性についての主張の仮説的性質

前節では、フーコーによって言説なる対象が発見されるまでの経緯を見てきたが、こうしてみるとここには、今日の我々が言説分析というときに想定するような言説の性質の特徴が極めて vivid に現れているということができるだろう。すなわち、ここでいう言説とは、主体の意図とは切り離されて理解されるべきものであると同時に、言説の発せられた諸状況へと還元されることを許さないような、自律的な水準を抱えているとされる。

このような性質を言説が持つことがあるということ、またそれは、例えばブルデューが分析するように、「表象された事物よりも表象そのもの」[Bourdieu 1979: 訳 10] を信じるのが賞賛されるような「純粹視線」が要求される芸術の場において特に顕著である、ということは認められるべきである。しかし、同時に検討されるべきは以下の点である。

前節で述べたような言語の自律性についての主張は、文学論の範疇で論じられている限りにおいては、「言説という自律的な領域が存在する」という主張に止まっていた。しかし、その構図が一端、社会的な現象の次元で現れた規則性を説明するために転用されたとき、その主張は、「自律的な領域が存在する」という主張には止まらないで、「言説のこの自律的な性質こそが現象を説明するのだ」という、より踏み込んだ主張になるであろう。

しかし、「自律的な領域が存在する」という主張と、「自律的な領域こそが現象を説明するのだ」という主張とでは、その含意は大変異なったものとなる。例えば、前者では、言説を発した者の意図、場の状況、受け手の合理性、などなどと合わせて、言説自体の働きも勘案に入れなくてはならない場合がある、と主張されているわけである。ところが、後者では、他の一切を排して、言説の働きのみが現象を説明するべきだと主張されているのである。すぐ理解されることだろうが、ここには、「言説の働きこそが社会現象のあり方に決定的に作用しているのだ」という証明のない前提が置かれている。

本稿の課題は言説の特定の見方に与することではないのでここでは以上の問題提起に止めるが、今述べた疑問だけからでも次の二点については了解されるはずである。すなわち、①言説の性質とは今述べたような社会のしくみについての特定の理論とは切り離しては考え得ないということ。例えば「外在性」のような言説のある性質についての措定は、（それが文学論に止まらずに社会的な現象を対象とする限りにおいて）「言説の働きこそが社会現象を規定する」という社会のしくみについての特定の理論を前提としていた。そしてより重要な点は、②ここで前提される社会のしくみについての特定の理論とは本来、仮説的な性質のものであるという点である。すなわち、フーコーの『知の考古学』からも明らかだが、「言説の働きこそが社会現象のあり方に決定的に作用している」ということは論証されてはいない [渡辺 2003a]。

もちろん、証明されていないからといって間違っているというわけではないが、それは依然として仮説的性質に止まる以上、その仮説を共有しない観点から行われる、言説という分析単位を用いた分析を否定する正当な根拠はないとも言える。言説分析とは複数ありうるのである。このことは、以下の章でみるフーコーというひとりの理論家の歩みからも伺えるであろう。

3. 分析の諸類型の再構成

前章では、我々は、ふつう言説分析といわれるときの暗黙裡の参照先とされている言説の性質を、芸術場という特殊な環境において、社会のしくみについての特定の仮説との関わりで生み出されたものとして描き出した。この言説の性質に基づいて生み出された様々な知見の重要性については疑うべくもないが、同時に、この見出された性質の前提となっている社会のしくみについての特定の仮説については、これを意識的にみていく必要があるのではないかという問題提起をも行った。

以上の点を踏まえて、本章以下では次のような展開を考えている。すなわち、ミシェル・フーコーにおける言説の発見の諸経緯が今述べたとおりであったとしても、フーコーは自らの方法論的な展開に合わせて、言説の諸性質を次々と異なるものとして見出していくのが観察されるのであるから、そこで「それぞれの時期で言説というものがどのような社会のしくみについての仮説的前提の元で注目されてきたか」ということを明らかにしたいと考えるのである。そうすることで見込まれるのは、論者が説明しようという社会現象にあわせて柔軟に姿を変える言説への着眼の仕方を明確化することであるが、ここには、言説分析をめぐる既存の議論では表面化してこなかった、分析のプログラムにあわせて戦略的に構築される言説なる分析単位の有効性というものを評価・検討しうる場が見出せるように思われるのである。

前置きが長くなってしまったが、ここで、上記の問い「それぞれの時期で言説というものがどのような社会のしくみについての仮説的前提の元で注目されてきたか」を考えるために、少々迂回して、P・ヴェーヌ [1978] の示唆を参照しつつ、フーコーの生涯にわたる関心事を指摘するところから議論を起こしたいと思う。

ヴェーヌも述べるように、フーコーが対象としてきたのは、(言説の実践までを含めて)の諸実践の不均等でまばらな分布であったと思う。「なぜ、言説aであって、言説bではないのか」「なぜ、ふるまいcであって、ふるまいdではなかったのか」……このような素朴な疑問から発して、フーコーは、他方を実現して他方を不可能にしたメカニズムを説明可能とする方法を練り上げてきたのだ、と、まずはまとめることができると考える。

このように考えるとすると、それぞれの時期でフーコーがそのようなメカニズムを可能にしたものとして以下の3つを考えていたことが見えてくる⁽⁶⁾。

1つは【法則】である。例えば、古典主義時代に属する人々にとって、狂人という存在は「貧乏人、失業者、軽犯罪者」[Foucault 1961→1972:59=1975:68] などと同じ存在に見えてしまったし、あるいは、18世紀中葉の医師ボンムが粘膜を記述した一文は今日の我々には奇妙というほかないけれども [Foucault 1963a:vi=1969:2]、当時の人々にはそう知覚されてしまったのである。それは、知覚や感受性 (=sensibilité)、つまりは、とある経験の問題なのか、それとも、言説の働きの問題なのか [Foucault 1969] という違いはあるにしても⁽⁷⁾、ここで問題となっているのは、「なぜaではなくてbだったのか」という問いに対して、最終的には⁽⁸⁾、「そうだったからそうなのだ (bと見えてしまったのだ、bという言説が存在してしまったのだ)」と応えざるを得ぬような【法則】であることは明らかなように思われる [渡辺 2003a]。

もう1つは【権力】である。『監視と処罰 (監獄の誕生)』[1975] を執筆したときにフーコーは、問題が【法則】ではなかったことを明言していた。身体刑から懲役刑へと刑罰の形が変化してきたという出来事について述べながら、フーコーは言う。「だが、どこ

を出発点にすれば、裁判を行なう近代精神のこうした歴史をつくりあげることができるだろうか。その範囲を法規則の、あるいは刑事訴訟手続の進展だけに限定する場合、われわれは集団的な感受性における1つの変化やヒューマンイズムの進歩や人間諸科学の発展が、どろどろとした、外的な、惰性的で原初的な事柄として浮かび上がるのをそのまま放置する恐れがある」[Foucault 1975:27-28=1977:27、傍点部筆者]。傍点部で述べられていることは単純である。要は、先の例のように、感受性などを「aではなくてbであった」ことの説明に据えてしまえば、そこで議論が終わってしまうと述べられているのである。そしてその代わりに据えられるのが【権力】であった⁽⁹⁾。

最後の1つは【合理性】である。実際、人がaではなくてbを行うのには、強制によるばかりではなく、「bのほうが合理的であるからだ」という、より単純な答えが存在するだろう。実は、晩期フーコーの統治性や自己についての研究は、それぞれ領域を違えるとはいえ、どちらも、(特定の地域・時代の)合理性の構造の探求として分析できる[渡辺2003b]。

今述べたところをまとめておくと、「aではなくてbであった」メカニズムを可能にした動因としてフーコーは3つのものを考えていたことになる。それは、【法則】【権力】【合理性】であった。

この観点から、「それぞれの時期で言説というものがどのような社会のしくみについての仮説的前提の元で注目されてきたか」という最初の問いは、今述べた3つの動因の中で言説にどのような役割が与えられていたかという問いへと還元できるように思う。

4. 見出された言説の役割

見通しをよくするため、ここで議論の見取り図を予め提示しておきたいと思う。この章の議論は下記の表を参照しながら進めたい。

(1) 【法則】における言説

【法則】が動因として見出されるところでは、言説はどのような観点から見出されることになるだろうか。『知の考古学』[1969]の議論を詳細にたどる紙幅はないが、そのエッセンスを振り返ることでその問いに答えを与えたい。

II章では言説の一群を同定するための4つのポイントが押さえられており、III章の議論では、個々の場で発せられる言表というものの特性である4つのポイントが押さえられていた⁽¹⁰⁾。両者はそれぞれマクロとミクロに対応しているが、そのつながりを再構成することからそこで言説に割り振られた役割を見ることができるだろう。以下では6項目に分けて、そのつながりの実際について詳述しておく。

①言説の一群を同定する4つの特性は、それぞれ、諸関係の成立として、描かれている。

表－1 動因と言説の役割の関係

不均等の動因	見出された(構築された)言説の役割
【法則】	諸関係を成立させるものとしての言説
【権力】	道具としての言説
【合理性】	定式化しての言説

この諸関係というのは現実的制度でのみ成立する関係ではないし、言説内部でのみ成立する関係ではないという。

②この諸関係を成立させる（すなわち、それらを繋ぎ合わせる）のが、言説的実践の特徴である（les mises en relations caractérisant une pratique discursive）[Foucault 1969:65]とされる。「実践」という語が登場するのは、制度と言説との両方で作用する何らかの働き、という期待をもたされてのことであろう。

③言説的実践に対応するのが、個々の場での実践としての言表であり、厳密にはそれが果たすとされる言表機能（la fonction énonciative）である。機能とは、それが出現した瞬間にあることを行ってしまうことであり、ここでいう「あること」とは「実践」の特徴とされた諸連関の成立である。

④すなわち、言表は発せられるたびに諸連関を成立させている、ということになる。厳密に言えば、言表はそのつど特定の方向付けられた仕方で作用することで、不断に既存の諸連関を再活性化している、とされる。

⑤ここで特定の方向付けられた作用の仕方へと導くのが（そのことを保証するのが）、フーコー言うところの【法則】としての言説の編成規則である。

⑥そうした作用が反復されて、言説の特性が形作られるといわれているのである。

込み入った議論であるが、⑤にあるように、最終的に「連関aではなくて連関bが再活性化される」ことを保証しているのは、（今述べたわたしの解釈が正しければ）【法則】である。そしてこの点が重要であるが、この法則に見守られながら、実践としての言表は、発せられるたびに特定の諸連関を繋ぎ合わせ、その作用が繰り返された挙句、特定の諸連関から成る諸特性を帯びた言説の一群が、ある地理的・時代的範囲で、出現することになるとされているのである。

このように議論が組み立てられるとき、言説とは法則が働くときの媒介（あるいはエージェント）として見出され、それは法則を実現する使命を帯びて、人々を制御する性質を有することになるだろう。

（２）【権力】における言説

【権力】が動因とされるところでは、そこで言説に割り当てられる役目は道具としての役割である。道具である以上、それは何らかの制御の性質を期待されていることは見やすい。

フーコーが最初に念頭においているのは丁々発止のやりとりが見られるゲーム的状况である（以下、『知への意志』第４章を参照のこと）。この状況では向かい合うメンバーが常に相手を自分の意のままにふるまわせようと熾烈な闘争が行われることが期待されている。そうした状況が無数にありそれらが特定の仕方結びつく（連鎖 enchaînement することから、実践の不均等な分布が結果すると考えられているのである [渡辺 2005]）。

さて、この「無数の力関係」[Foucault 1976:122=1986:119]においては、メンバーは言説を一種の資源として用いながら相手の行動を制御しようとするし、同じ言説を異なるように作用させながら制御し返そうとするのが見られるだろう。従って、ここで言説に割り振られる性質は制御のそれだが、それは先の【法則】の場合のように安定したものではなく常に不安定なものであるという。

ところで、ゲームが恒常的に不安定なものであって、その場でメンバーが互いに言説を

道具として用いようとするのであれば、本来であれば、言説の分布は均等になるはずである。だが、関良徳 [2001] も指摘するように、実際のところは、この動的なゲームはその不安定さの故から恐れられ、我々はその不安定さを確固とした安定性（一方の側の常なる勝利）へと転じるための諸々のテクノロジーを発達させてきたのである。それが、『監視と処罰』における「規律・訓練」であり、『知への意志』でいう「告白」である。あまり指摘されることはないが、これらのテクノロジーは、ゲーム的状况の終結に起因するところの言説の不均等な集積としての「アルシーヴ」を母体として効率的に運営されているのである。

すなわち、規律・訓練の1つである試験について、フーコーは言う。「試験はその背後に、人々のさまざまな身体および日時の次元で組立てられる、微細かつ精密なアルシーヴをそっくり残す」[Foucault 1975:191=1977:192]。そして、このようなアルシーヴは人間諸科学などの知の母体でもあるのだが、そのような知を効率的に用いることでゲームはより安定化すると指摘されているのである⁽¹¹⁾。

まとめておくと、【権力】が動因とされるところで見出される言説は、他者のふるまいを戦略的に制御する際の道具の1つとして見出されるが、それが実際にその役割を果たしうかどうかは不確実なために部分的な制御をしか果たし得ない。しかし、確実な制御において用いられる折には、それは不均等な集積によって「知」を生み出すという性質をも帯びるのである。

（３）【合理性】における言説

【権力】が動因として見出されるところでは、言説の不均等な集積はゲームの一方的な終結に起因するものであった。しかし【合理性】が動因として見出されるとき、言説が集積するのは、ゲームが最も盛り上がっている場においてである。どういうことか。

先ず【合理性】が動因であるとはどういうことか、というところから議論を進めたい。それは簡単には、「あるふるまいaの方があるふるまいbよりも合理的である」と考えられる状況のことを指す。しかし、これで説明を終えたとしたら、さして【法則】による説明よりも前進したとは思われない。そこでフーコーはこの合理性の構造を分析するための新しい方法を生み出すのである [渡辺 2003b]。

その方法の核心に位置するのは、問題構成（=problématisation）である。つまり、「何が問題だとして考えられているか」ということである。この点はこれまであまり議論が深まらないままであったのでここで明確にしておきたいが、「何かが問題として構成される」とは、以下に述べるような3つのプロセスが同時進行することを意味する。

第一に、何かある現象が「問題だ」と考えられるためには、その現象の要素が何らかの位置づけのなかで「対象化」される必要がある。例えば、古代ギリシアにおいて、性的な活動は、「暴力的な激烈さ」として対象化されていた。

すると、第二に、その対象化に対応して、ひとは一定の方針に従ってふるまわなくてはならないことになるだろう。先の例で言えば、激烈さを力づくで押さえつけられるような強い男として自らを形成するという「要請」が生じることになる。このメカニズムにフーコーは「主体化」という言葉を与えている。

最後に、その主体化には特定の諸「実践」が伴わなくてはならない。激烈さを押さえつけるためには具体的にはどのように振舞わなくてはならないか、諸々のガイドブックがふ

るまい方を指示するのである。

すなわち【合理性】が動因であるとは、特定現象の「対象化」に伴う「問題構成」の中で、特定の諸「実践」を整合的に行おうとするような「主体化」が起きるという一連のプロセスの結果、言説やふるまいの分布の不均等が生じるという説明図式なのである⁽¹²⁾。

さて、ここで話を戻すと、このような図式の中で、言説に割り当てられる役割とはなんだろうか。それは、特定の主体化のあり方に何らかの定式を与えようという努力としての言説である、といえよう。

これはこういうことである。問題構成には難易度の幅が生じる。つまり、わざわざ改めて論じるまでもないような自明なことについては、人はそれを言説にはしない。反対に、諸々の利害が重なり合い複数の見解が生じ得るような場、あるいは、問題構成が複数の主体化のあり方のなかで矛盾を抱え込まざるを得ないような場については、極めて大量の言説が集積することになるという。

例えば、古代ギリシアの同性愛実践において青年と壮年とが結びつくというケースを巡っては、極めて大量の言説が集積したという。というのはここには極めて難解な問題構成が見出されていたためであって、有望な将来のためにも「能動的」であるべき青年が、壮年との同性愛的実践では「受動的」になり得てしまう、というジレンマがそれである[Foucault 1984a]。だが、古代ローマにおいて、夫婦生活の情緒的で対等な関係に価値が見出されると、今度は、そのような対等関係としての夫婦生活においていかなるふるまいがなされるべきか、を定式化しようとする言説が集積すると同時に、同性愛的実践は周辺化された一特殊ケースへと格下げされてしまったという[Foucault 1984b]。

つまり、極めて難解なジレンマを抱えるか、複数のあり方が可能となってしまう場においてこそ、妥当なふるまい方についての定式化をしようという努力の激しさとしての言説の集積が見出せるというのである⁽¹³⁾。

5. 「言説」の分析可能性

本稿では、「言説分析とは何であるべきか」という問いの代わりに、フーコーが諸々の社会のしくみについての背後仮説の元でどのような言説の用い方をしてきたかという問いを立てその多様性について論じた。その結果としての本稿の問題提起は以下の三点に要約できる。

①言説の性質とは、社会のしくみについての論者の理論を前提として、それとの関わりから構築される。②この社会のしくみについての論者の理論とは、その当否についての討議に開かれてあるべき仮説的な性質のものである。③言説の性質は、論者らの社会のしくみについての理論が複数ありうるのに対応して、複数存在する。

以上の論点を踏まえて、本稿が言説分析についてのそれ自体生産的な現状の議論に対して何事かを付け加えうとしたら、以下のような主張となろう。それは、言説をどう見るかということは、その論者が、社会のしくみを規定するどのような動因に注目しようとしているのかによって変わってくるのであるから、そこで言説の扱われ方だけを取り出して議論をしようというのは、議論の過程で特定の社会的メカニズムについての論者の前提を密輸入するということにもなってしまうかねない。そうではなくて、言説を用いるときに、どのような社会的メカニズムについての仮説の元で言説を取り上げ、どういう性質のものとして見ようとし、そうすることで、社会の何を分析しようとしているのか、について明

確化することが、言説の分析において重要なことであろう、という主張である。

今述べた点を次のように言い換えることもできる。今見てきたように、言説の諸性質というものが分析対象や論者の問題関心との関係で戦略的に構築されるべきものであるとしたら、今後、方法論的な議論の焦点は、言説の脱コンテクスト的な性質に依拠した言説分析の方法論から、言説という対象をいかなる分析可能性を帯びたものとして構築することができるか、という点へと移行していくことになるのではないか。

最後に本稿の限界と今後の課題とを述べておく。第一に、本稿は、社会のしくみについての仮説の複数性を論じたが、それぞれの妥当性の検証はしなかった。第二に、本稿自体も方法論的水準の議論に止まり、筆者自身がいかなる分析のなかでいかなる性質の言説を構築しようとしているのかについて述べるができなかった。それぞれ別稿を期したい。

付記

本稿 2 章は日本社会学会研究例会での報告原稿を、3 章以下では日本社会学会熊本大会での報告原稿を元としている。いずれもコメンテーターの先生方の有益なコメントを受けて議論の組み換えを行っている。先生方に感謝したい。

註

- (1) 殊に、佐藤俊樹 [1998]、遠藤知巳 [2000]、赤川学 [2001] らの議論を参照。
- (2) 例えば、注 1 に挙げた諸議論を参照。
- (3) 但し、A・ホネット [1985=1992]、内田隆三 [1990]、などは文学論に言及している。
- (4) 例えば、ヌーヴォー・ロマンの書き手であると同時に優れた方法論者でもある A・ロブ＝グリエのレーモン・ルーセル論をベースとしてはじめて、後述するフーコーのルーセル論も可能であった事実にも注目したい。また、R・バルトらによる新しい批評理論も彼らの影響下にあった。
- (5) 以下の紹介については、岡谷公二 [1998] を参照した。内田 [1990] も参照のこと。
- (6) 晩期フーコーもまた自らの知的営みを三期に分けて考察しているが、これは対象領域に基づいて行われた区分であった。この区分の紹介は多くの先行研究でなされている。それに対して本稿の区分は、対象領域によってではなく、社会的メカニズムの主要な動因に着目した読解に基づいて主張されている。両者が質的に相違しているのは言うまでもない（前者は例えば I・カントの批判書が「(理性・実践・判断力の) 3 つの領域から構成されている」という指摘以上のものではない）。
- (7) フーコーは 1963 年に刊行した『臨床医学の誕生』を 1972 年に改稿している。このとき、知覚や経験の問題として説明されていたものを言説や知の問題へと改める作業を行っている。一例を挙げておく。「臨床医学の形成は、経験の根本的な諸構造におけるもろもろの変化を、最も可視的に証言するものの一つにすぎない」⇒「臨床医学の形成は、知の根本的配置におけるもろもろの変化を、もっとも可視的に証言するものの一つにすぎない」。
- (8) 結局、多くの論者によって批判されてきた、このような、規則性自体の法則化とも呼べる事態とは、言説に現れた規則性を言説自体によって説明しようとする議論の仕組み自体に起因するものである。
- (9) ここでいう権力とは、「他者の可能的行為の領域を構造化する」ような「行動様式」であるというフーコー自身の定義を採用しておく [Foucault 1982→1994:239=2001:26]。
- (10) 言説の一群を同定する 4 つの特性とは、対象を成り立たせている諸連関、諸主体の諸役割を成り立たせている諸連関、概念の編成を成立させている諸連関、戦術的な理論戦略を成り立たせている諸連関における特定のあり方として記述できる。言表機能の 4 特性は、これらの連関の両端にある諸要素同士を媒介する位置づけを与えられており、それは、対象を構成しうる関説性を指示する機能、言表主体の役割の諸条件を指示する機能、概念を自らとの関係で成立させている共同の領野に言表を関係づける機能、理論形成を成立させる諸連関を構成している既存の理論と現実の非言説的制度の中間にあ

るという言表の物質性をもたらすそれらの関係づけの機能、の4つである。

- (11) 例えば、犯罪者の生活態度についての知から、人間の犯罪的性質の实在を仮定した学問が生まれ、そこから逆流して、犯罪者をその性質（つまりその内面）において判断する要請が生まれる。その結果として、規律・訓練のテクノロジーを行使しようとする側は、観察対象をその行為自体からその内面へと移行させ、より繊細で効率的な支配、すなわち可能的行為の構造化を達成することが可能になる、とされている。
- (12) いずれ別稿にて詳述の予定だが、特定現象がこう知覚できてしまったという「対象化」、かくかくの者としてふるまおうという無意識裡の実践統合としての「主体化」、これらを生み出す「これが問題だ」という「問題構成」のそれぞれは、意味世界を構造化し、ある方向性を与える相異なる諸要素から成るシステムともいうべきものであり、これらを一様に「意味」なり「知識」なりとして概括するのは誤った概念化というものであろう。ヴェーヌ [1978=1983]、渡辺 [2003b] も参照。
- (13) もう1つ重要な点は、そこで用いられている分析上の指標である。問題構成の中心がそこに存在することの指標として見出されるのは、一般的な言説分析で多用される言説の多／寡だけではない。それだけではなく、言説化の粗／密ともいうべき分析上の指標も存在しており、問題構成のあるところでは現象のカテゴリライズのされ方が極めて細部にわたる一方で、その反対に大して関心の無いところではあいまいな言い回しが多用される。また、創意／陳腐も重要で、先の青年の同性愛の例で言えば、古代ギリシアにおいてはプラトンらをはじめとして極めて創意に満ちた定式化がなされた一方で、古代ローマに至ってはほぼ「繰り返し」によって議論が構成されていたという。

文献

赤川 学 2001「言説分析とその可能性」『理論と方法』16(1): 89-102.

Bourdieu, P. 1979 *La distinction: critique sociale du jugement*. Minuit. 石井洋二郎（訳）『ディスタンクシオン1』新評論 1989.

遠藤知巳 2000「言説分析とその困難——全体性／全域性の現代的位相をめぐる」『理論と方法』15(1): 49-60.

Foucault, M. 1961→1972 *Folie et déraison: Histoire de la Folie à l'âge classique*. Gallimard. 田村俣（訳）『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社 1975.

—— 1963a *Naissance de la clinique: Une archéologie du regard médical*. P.U.F. 神谷美恵子（訳）『臨床医学の誕生』みすず書房 1969.

—— 1963b *Raymond Roussel*. Gallimard. 豊崎光一（訳）『レーモン・ルーセル』法政大学出版局 1975.

—— 1966a *Les mots et les choses*. Gallimard. 渡辺一民・佐々木明（訳）『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社 1974.

—— 1966b→1994 “La pensée du dehors,” in Defert, D. & Ewald, F. (eds.), *Dits et écrits 1954-1988 par Michel Foucault*, tome I. Gallimard, pp. 518-539. 豊崎光一（訳）「外の思考」蓮實重彦・渡辺守章（監訳）『ミシェル・フーコー思考集成Ⅱ——〈1964-67〉文学／言語／エピステモロジー』筑摩書房 1999, pp. 335-365.

—— 1969 *L'archéologie du savoir*. Gallimard. 中村雄二郎（訳）『知の考古学』河出書房新社 1995.

—— 1971 *L'ordre du discours*. Gallimard. 中村雄二郎（訳）『言語表現の秩序』河出書房新社 1995.

—— 1975 *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. Gallimard. 田村俣（訳）『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社 1977.

—— 1976 *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*. Gallimard. 渡辺守章（訳）『性の歴史Ⅰ——知への意志』新潮社 1986.

—— 1977→1994 “Entretien avec Michel Foucault,” in Defert, D. & Ewald, F. (eds.), *Dits et écrits 1954-1988 par Michel Foucault*, tome III. Gallimard, pp. 140-160. 北山晴一（訳）「真理と権力」蓮實重彦・渡辺守章（監訳）『ミシェル・フーコー思考集成Ⅵ——〈1971-73〉セクシュアリティ／真理』筑摩書房 2000, pp. 189-219.

—— 1982→1994 “The Subject and Power,” in Defert, D. & Ewald, F. (eds.), *Dits et écrits 1954-1988 par*

- Michel Foucault*, tome IV. Gallimard, pp. 222–243. 握海和久（訳）「主体と権力」蓮實重彦・渡辺守章（監訳）『ミシェル・フーコー思考集成 IX ——〈1982–83〉自己／統治性／快楽』筑摩書房 2001, pp. 10–32.
- 1984a *Histoire de la sexualité II: L'usage des plaisirs*. Gallimard. 田村俤（訳）『性の歴史 II —— 快楽の活用』新潮社 1986.
- 1984b *Histoire de la sexualité III: Le souci de soi*. Gallimard. 田村俤（訳）『性の歴史 III —— 自己への配慮』新潮社 1987.
- Honneth, A. 1985 *Kritik der Macht: Reflexionsstufen einer kritischen Gesellschaftstheorie*. Suhrkamp. 河上倫逸（監訳）『権力の批判——批判的社会理論の新たな地平』法政大学出版局 1992.
- 岡谷公二 1998 『レーモン・ルーセルの謎——彼はいかにして或る種の本を書いたか』国書刊行会.
- 佐藤俊樹 1998 「近代を語る視線と文体——比較のなかの日本の近代化」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学 1 理論と方法』東京大学出版会 pp. 65–98.
- 関 良徳 2001 『フーコーの権力論と自由論——その政治哲学的構成』勁草書房.
- 内田隆三 1990 『ミシェル・フーコー』講談社.
- Veyne, P. 1978 *Foucault revolutionne l'histoire*. Editions du Seuil. 大津真作（訳）『差異の目録——歴史を変えるフーコー』法政大学出版局 1983.
- 渡辺彰規 2003a 「ミシェル・フーコーにおけるアルシーヴという隘路——考古学的手法における規則性・法則・権力」『ソシオロギス』27: 192–206.
- 2003b 「晩期フーコーにおける〈実践〉分析の要点」『現代社会理論研究』13: 11–22.
- 2005 「後期フーコーにおける権力現象の多層性について——知と権力との多様な関係性に注目して」『ソシオロギス』152: 19–35.

（東京大学人文社会系研究科博士後期課程